□新春特別対談

田辺聖子VS新井満

田辺小説、うらから読めば新井小説

かたや、小説、映像、歌にと、マルチタレントぶりを遺憾なく発揮されている新井満さん。こなた、女性読者の圧倒的支持を得ている田辺聖子さん。この両芥川賞作家の共通点は、かつて神戸に住んでいらしたこと。今日はそのあたりのお話や、芥川賞よもやま話などを、ざっくばらんにお話しいただいた。

いっぱつめと苦節4度め

田辺　新井さんはやっぱり、ワープロを使いはるんでしょ？

新井　いえ、それが違うんですよ。どうしてワープロだとおっしゃるわけですか。

田辺　何となく新井さんのイメージからワープロやと。

新井　それは美しい誤解というものですね(笑)。何となく機械に強いんじゃないかとか、最新ファッションに詳しいんじゃないかとか(笑)。ところがどっこい…

――だめなんですか。

新井　全然だめなんですよねー(笑)。

田辺　この前、五木寛之さんにお会いしたんですが、あの方も鉛筆やそうで。三菱の2B、私は4B。

――満さんは？

新井　僕はシャープペンシル。

――満さんは第99回の芥川賞でしたね。

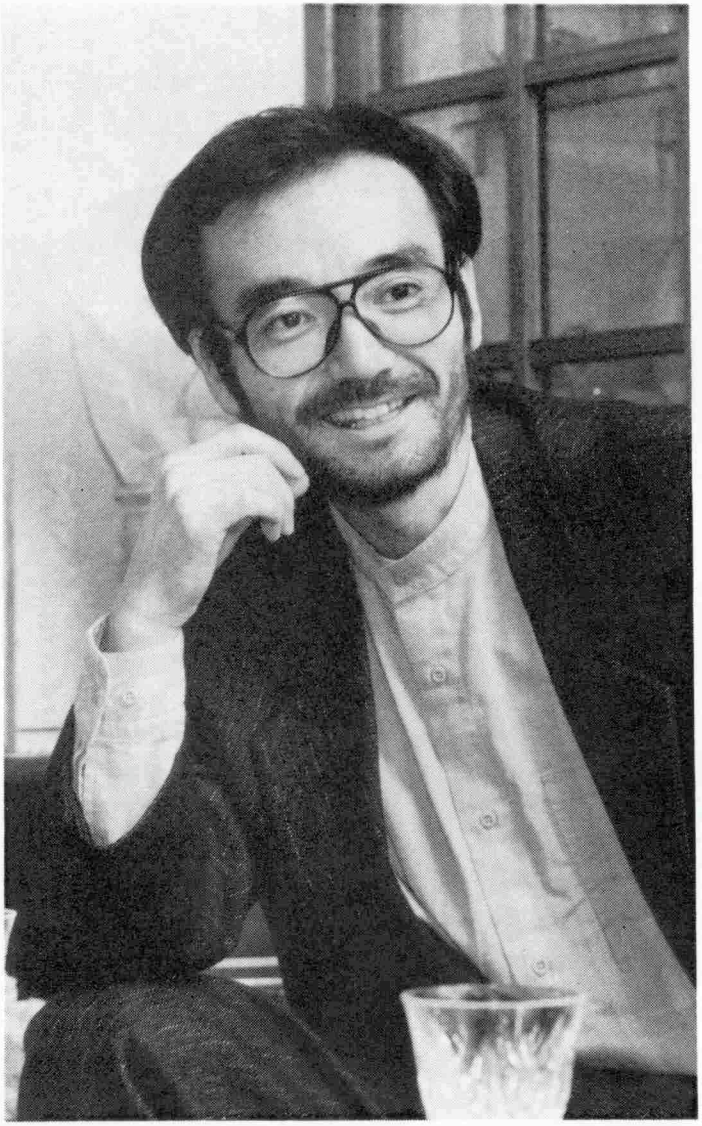
新井　はい。田辺さんは第何回でした。

田辺　50回ぐらいじゃないかしら。

新井　そうするとちょうど半分。今度が第100回でしょ。ちょうど昨日、文芸春秋社から電話があったんですが、芥川賞全集というのがでてますよね、何年か前に完結しているんですが、今度新たに100回を記念して、10巻の全集を出すので、ぜひ収録させてほしいと。で僕は別にいやみじゃないんですが、第100回に受賞作が出るといいですね、と言ったんです。

田辺　ほんとね―。

新井　該当者なし、なんてことになると盛り上がりませ



んから。

田辺　そうなのよねえ。私この前、小説すばる新人賞の審査員をやったんですが、「小説すばる」は出たのですが「すばる」のほうは受賞者なかったんですよね。それで編集部の方々が、受賞者がいないということが、こんな寂しいこととは思いませんでした、と話しておられました。文壇全体も盛り上がりませんものね。

新井　披露宴に行ってね、新郎新婦がいないようなものですからね(笑)。そら盛り上がらないわ。おめでとうを言う相手がいないんだから(笑)。

田辺　お色直しで出て行ったんなら、また出て来ることもあるけど。

新井　あればっかりは、代わりにやってあげるわけにはいかないしね(笑)。

田辺　新井さんは受賞なさって、人生が変わったような気がします？　第二幕が始まったとか…。新しい可能性の幕が開けたわけやから、またいろいろ挑戦の目標ができるわね。

新井　あまり変わらなかったようですね。

田辺　何か冒険してみようとか、恋愛のチャンスが増えるとか(笑)。もっと端的に、もてるとか(笑)。

新井　いや―笑―昔も今もあんまりもてませんね。…じゃあお聖さんの時にはおもてになったわけですね。

田辺　―笑―

新井　そういう質問が出るということは。

田辺　うーん、まだ女性の物書きが少なかったし、大変大事にして下さったわね。

新井　僕も受賞の瞬間に関しては、随分といろいろ聞かれましたので、一度伺いたいと思ってたんですけど、聖子先生の時にはどんな感じだったんですか。

田辺　私の時は神戸新聞の方から、どうも有力らしいので大勢人が来ますよ、と言われていたんです。で私は母に、ここにたくさんの人が来られたら困るねぇ、今のうちにふすまをはずしちゃおうか、何て言ってね。二間しかなかったもんで。それでふすまをはずしたんだけど、お茶を入れるといってもおやかんがないのよね、特別大きなのを買いに行って、それからやはり女ですから、いやだこんな髪(笑)とか言って、パーマに行ったりしたんですよ。受賞は7時過ぎに決まったんですが、それからどんどん人が集まってきて、写真をとられたり、テレビカメラを向けられたり…ちゃんとテレビのあった時代でしたから(笑)…それで狭い所だったので、前の国道2号線まで人があふれて、何事だろうと派出所からおまわりさんがとんできて、車を整理し、お茶を一杯飲んで帰りはったんですよ(笑)。

新井　おまわりさんもどさくさに紛れて(笑)。でも何が起ったのかは、よくわかんなかったでしょうね。

田辺　そうでしょうね。やはりその筋の人でないと(笑)私の弟でさえその日残業から帰って来て、何やえらい人がぎょうさん集まって、と(笑)。うれしかったのは真夜中過ぎに、同人誌のメンバーが駆け付けてくれたことですね。

新井　マスコミの人は何人ぐらい来られました？

田辺　次から次に来られたので、よくわからないんですが、100人は来なかったんじゃないかしら。

新井　でも、やかんでっかいの買っといて良かったですね―。パーマに行っといて良かったですね―(笑)。ところで何度めのノミネートで受賞されたんですか。

田辺　私、初めて。いっぱつでもらったの。

新井　くわぁ～、いやんなっちゃったな―。何か飲もうかな―(笑)。あーいっぱつめでしたか。大ラッキーでしたね。

田辺　そうですねー。新井さんは何度めだったんですか。

新井　僕は苦節4度めです(笑)。3度めの時にね、ほとんど、もらえるんじゃないかと言われてたんですよ。

田辺　いやなんで〝ヴェクサシオン〟が一番初め？

新井　最初が〝サンセットビーチホテル〟、次が〝苺〟3度めが〝ヴェクサシオン〟

田辺　ああそうか。〝苺〟は覚えてる。

新井　〝苺〟はね、山田詠美さんと争って、結局該当者なしに終わったんですよ。

田辺　〝苺〟良かったのにねー。私〝ヴェクサシオン〟も好きよ。もちろん〝尋ね人の時間〟も良いけど。

新井　〝ヴェクサシオン〟の時は村田喜代子さんの…

田辺　〝鍋の中〟がとったわけですね。がっくりきたでしょう。あれは自信作だったんじゃない。

新井　自分では良くわからなかったんですけど、まわりがね、これはいけるよ、とかね。スポーツ新聞も、「今度は電通だ」とね。前回の直木賞が博報堂の人でしたから(笑)。それで「新井満を持す」(笑)とかね、書きたてるわけです。おもしろおかしく。

田辺　そんなこと書くんですか。

新井　書くんです。もうほとんど競馬の予想みたいに。山田詠美2重マルとかね、対抗だとか、穴馬だとか(笑)。

田辺　スポーツ新聞といったら、スポーツ記事とお色気だけだと思ってました。

新井　最近はね、文壇のそういった情報も、おもしろおかしく書くわけですよ。

田辺　いやぁねー、そんな競馬みたいな…(笑)。

新井　まあそんなことがあって、だんだん本人もその気になってきまして…これはいけるかな…という。だから屋根の上に登らされてね、その後でハシゴをとっぱらわれたようで、〝ヴェクサシオン〟の時は。

田辺　あれは絶対だと思ったけどねー。

新井　あの時とっていれば、もうピースピース(笑)という感じだったんだと思うんですよ。岩波ホールにね、30、40名ぐらいの報道陣がいて、高野悦子さんがシャンペンまで用意して下さっていたんです。そこへだめだったという電話が入って、もうみんなどっちらけもいいところで(笑)、し——んとして。あの時の新聞記者の落胆ぶりはーああ俺は何でこんな不運な男といっしょに、時間をつぶしていたんだーという感じで、で僕は別に悪い事をしたわけじゃないんですが、ー申しわけございませんーという気持ちになって(笑)…。

田辺　ー笑ー　最高と最低を味わったわけですね。でも今回の芥川賞に〝ヴェクサシオン〟に対する評価も入ってますね。

新井　そうですかね。

田辺　着実にレンガを積み重ねてきはったんですよ。

——〝ヴェクサシオン〟の方が良かったという人、多いですからね。

新井　じゃあ何であの時くれないんだ!(笑)。

田辺　後になってみんなそう言うのですよ。前の方が良かったって。

新井　お聖さんはみなさんに誉められたんですか。

田辺　まあそうなんですが、何かちょっと異様な作品だということでね、みなさん回りの顔をちらちら見ながら誉めていたようです(笑)。

新井　僕の場合ほぼ全員が「前作より落ちる!」(笑)だったんですよ。

田辺　ー笑ー。新井さんは文章修業をどこでされたのですか?

新井　いやー文章修業もなにも、小説らしい小説は〝サンセットビーチホテル〟が最初ですから。エッセーを除くと、修業らしい修業をせずに書き始めちゃった、という部分がありますね。

田辺　文章に対するセンスは、教えられて得られるものではないしねー。

芥川賞が生んだ恋?!

新井　僕は42歳の時に芥川賞もらったんですが、聖子先生は30代の時で、どうですか、相当急激に世界が変わりましたか。

——恋が生まれたんですよ。36歳で受賞されて、38歳でご結婚。そのあたりのお話を(笑)。

田辺　私が芥川賞をとった時の直木賞の候補だったんで

すよ、おっちゃんの前の奥さん川野彰子さんが。彼女は結局だめだったんですが、その時以来彰子さんとおつき合いが始まったんです。それがその年の秋に亡くなられておっちゃんは、物を書いていると身体に悪いねんなぁ、と思ったようで、「そんなんしたら死にまっせ」(笑)と私の所へ言いに来て、ドライブへ行ったりもして、という状態でした。

―― それから神戸へ移られたわけですね。

田辺 ええ、おっちゃんが兵庫区の荒田町に住んでいましたので、39歳の時にそこへ行きました。仕事がどんどん入ってきていた時でしたから、私の母親なんて「えーそんなん、結婚なんてせんだって…」(笑)。

新井 こんないそがしい時に何でするんだと(笑)。

田辺 そう、ひまな時やったらなんぼでも…(笑)。新聞の連載も2本持ってましたしねぇ。

新井 それは大変でしたね。

田辺 でもやっぱり40代て若いね。元気盛り、まだまだこれからですよ。

―― お二人とも神戸時代はすさまじかったですよね―

田辺 夜もよう飲みに行ったしね―(笑)。

新井 ああ、仕事もするし、遊ぶし……

田辺 飲んだ飲んだあの頃は(笑)。毎晩みたいにね。高橋孟さんともね、よくつるんで飲み歩きました(笑)。

新井 それで、その頃にお聖さんの小説に登場するのが、ハイミスというか…、華々しく遊ぶし、恋も多い、仕事もする。でもシングルだという。

田辺 ええ結婚した後から、ハイミスがでてきたり、中年男性が主人公になったりというのを書きましたね。

―― かえってひまな時って、恋ができないんじゃないですか。

田辺 そうかしらねー、私は押しきられてしまったんですよ。

新井 ほう、押しきられた!

―― 満さんは押しきったんですか(笑)。

新井 僕はもう…あの…全然関係ないもんね(笑)。何しろ大むかしの話ですから(笑)。

田辺 私のところはね、二人ともいそがしい仕事を持っていたので、別に結婚せんかて…と思ってたんやけど、オッチャンの方にしたら、おつき合いだけではいやだったのね。それで口説き文句がね「わしといっしょになったら、おもろい小説かけまっせ」というの。

新井 ―笑―

田辺 で職業的なすけべ心もあって(笑)、あっそうかなーと思ったわけですよ。

新井 あー向こうもツボを押さえてきましたね(笑)

田辺 そう、弱みを突いてくるわけですよ(笑)。

新井 そりゃちょっと心が傾きますね。

田辺 そうなんですよ。賞をとりたての物書きとしては、そうかなーなんて思うわけですよ。私はその時母親と暮らしていたんですが、私は美空ひばりじゃないので…

新井 えっ

田辺 美空ひばりは小林旭より母親を選んだけど(笑)。

新井 じゃあお聖さんは、小林旭の方をお取りになったわけですね。

田辺 ―笑―私は美空ひばりほど愛してはいなかったけれども(笑)。

新井 とにかく恋の方をお取りになった(笑)。

田辺 同じ苦労をするなら男で苦労したい、母親よりもと思ったわけです(笑)。確かに先方へ行ってみると、書く材料の無限にある(笑)家でした。それで神戸は女性の生きも良くて、いろんな人と知り合えて楽しかったですね。

新井 そうすると芥川賞を受賞されて、おっちゃんに出会われ神戸へ行って、元気のいい魅力的な女性に出会われて、そしてだんだんと、お聖さんの小説に登場する、非常にチャーミングな女性が形づくられてきた、という順序なわけですね。

田辺 それと街の雰囲気もありましたね。私、生まれは

田辺邸の応接室にてシェリーで乾杯

大阪なんだけど、体質としては神戸的なのね。

―― 作品に、神戸の男性の優しさもよく表われていますよね。

田辺 そう、神戸の男性は良いですね。

新井 それはどういう所なんですか。

田辺 神戸の男性は、女性の言うことをよく聞くのね。女性の意見をちゃんと聞くの。大阪の男性は聞かないのね。女の意見はいらない、といった感じ。それに女性はどこにいるんだろ、と思いますよ。パーティーでも男ばっかりで。神戸は半々ぐらいでしょ。

新井 そういうのは、日本で神戸ぐらいでしょうかね。

田辺 文壇でもね、この前からですよ、直木賞の審査員に女性が入ったの。もっと増えなあかんわ。

新井 どうですか直木賞の審査員は。初の女性審査員なんですが、何か雰囲気も変わったのかな。

田辺 そうねえ、作品の批評をする時に「これは女の腐ったような文体や」とか言えなくなったって(笑)。

新井 ああ―笑―そういう差別語がなくなった。

田辺 私はいつも読者代表のつもりなんです。他の審査員のみなさんは、プロ的な批評をされるんですが私は「いやーおもしろかっ

た」とか「あと味が良かったわー」とかね(笑)。

そして神戸、まず神戸

―― お二人とも現在神戸を離れていらっしゃるわけですが、いかがですか、離れてみて。

新井 そもそも神戸に住んでいなければ、今の自分がないのは確かなんです。神戸で電通にいるころ森敦さんに仕事でお会いして、歌を歌って、そうしたら映像を作るようになって、それが環境ビデオになった。そしてその最初の海外ロケがミクロネシアだった。美しい珊瑚礁があり、そこにビールの空き缶があったと。そこから100枚の〝サンセットビーチホテル〟が生まれた。それが「文学界」に載っちゃって、でとうとう芥川賞までいただきました。始まりは神戸だったわけですよ。僕は最初やって来た時に、ああ楽な街だなぁ、好き勝手に生きても、誰も文句言わないんだなぁって感じで、こういう街があってもいいのか(笑)と思ったぐらいで。僕は僕なりに開放されましたね。

田辺 それと比べると京都は一千年の歴史があるから。私の知り合いなんか、家を出てから駅に着くまでに、10回以上頭下げなあかんて(笑)。そういう街なんよね。

新井 京都というのは、積み重ねの極地のような街でしょう。神戸というのは良くも悪くも、中途半端な所がありますよね。

田辺 私が最初印象に残ったのはね、私の住んでた所は兵庫区の下町だったんやけど、おっちゃんの妹と市場へ行った時「家のもん、寝巻はここで買うねん」て言うから見たら、それが「寝巻屋」という店で(笑)、何と簡単な街なんやろと思ったのね(笑)。でも同時にすごくモダンで、開けてるのね。大阪はざっくばらんなように見えても、因習の街でしょ。男尊女卑も根強いし。それに比べるとすごく明るかったのね。私は一つの展開が得られたと思います、神戸で。中年男性ともよくつき合いましたしね。私は男性なんて全然知らなかったし、特に中年男性にはどう対処していいかわからなくて、日本語通じんのかいな(笑)というほどだったのね。でも神戸の男性はとても気さくで、いろいろとしゃべってくれるでしょう。だから彼らの裏側が見えたりして、中年男性を主人公にした小説も書けたのよね。京都とはまた違った意味で懐が深くて、小説の豊庫のような街でしたよ、昭和40年代の神戸は。

―― 息がしやすい街ですね。特に女性にとっては。

新井 どうしてだろうね。僕が一つ思うのは、神戸の街が持っている、ある種のがらんどう性というか、中心が抜けているわけですね。風通しが良くて、物が腐らないわけです。いつまでも、いくつになっても新鮮なんですよね。

田辺 以前は神戸って、東京の人知らなかったですよね。東京の人なんかが関西へ来て、大阪には泊っても神戸は単なる通過駅だったのね。

―― そして聖子先生が、神戸と宝塚を有名にされましたね。

田辺 そうねぇ、編集者の中にも、私の影響で宝塚狂いになった人がいるものね(笑)。

ハイミスの影に不能あり

―― 聖子先生は、魅力的なハイミスとか中年男性を描きながら、そういう人達を励ましているところがあって、満さんの作品はどれをとっても、現代の病を扱っていて、お二人は現代を違ったアプローチから描写していらっしゃるんですが…。

新井 田辺先生が、仕事も恋もバリバリするという人物像を作られましたよね。それに対応しているんです。僕の作品の登場人物が。例えば〝尋ね人の時間〟の主人公の〝不能のカメラマン〟とかね(笑)。

――つまり光と影というか、原因と結果というか。

新井　〝尋ね人の時間〟の中で、僕が唯一描いていないのは中年の女性なんです。10代、20代の女性は描いてるんですけど。お聖さんの小説に登場するような、ああいうチャーミングな女性が増えれば増えるほど、限りなく男は不能になっていくわけです(笑)。

田辺　本当、陰と陽ですね。

新井　だから田辺聖子文学の裏の世界を読みたければ、不能文学である新井の小説を読めばいいわけですよ。

田辺　―笑―

新井　今は男と女の関係も、さらっとした関係が好まれますよね。あまり汗をかきたくない、エネルギーを節約したいといった感じで。〝尋ね人の時間〟の主人公も、ある時カウンセラーに言われるんですよ。「あなたの身体に悪い所はない。もしかしたら不能になったことを歓迎しているのじゃないか」というようなことをね(笑)。つまり不能を理由に、もうちょっかいを出す必要もないし、出される危険もない(笑)これは楽なんじゃないかと。

――でも子供ができませんよ。

新井　そうそこなんですよ。子供はもう作る必要はないということですよ。だって50億人もいるんですよ、この地球に。だからもうこれ以上はいらないという、地球の無意識の知恵が働いているわけですよ。そういうことで時代の先端を行く職業に就いている人ほど、子供は作らない。不能であることすなわち子供ができない、つまり人口がこれ以上増えないということなんです。

田辺　地球の知恵ですか。

新井　最近女性が男性的になり、男性が女性的になるということで、両者の関係が中性化しているわけですね。だから発情しない。お友達になっちゃう。手を握り合って、月でもながめて満足している(笑)。ぎんぎん男にぎんぎん女なら、さあやろう(笑)となるんだけど。

田辺　異星人の陰謀ではないですか。

新井　異星人か――(笑)。

田辺　そう、地球を老人ばっかりにしようとかね。そういうウィルスを宇宙からバラまくわけ(笑)。

新井　まあ人類の寿命もね、50億年も経って…そろそろおしまいかもしれない。あっ大変新春にふさわしい話題になってきたぞ(笑)。

田辺　核兵器を発明したということが、そもそも破滅の第一歩やもんね。

新井　あれは墓穴を堀るということですからね。

田辺　それと原発もやね。あれも人類のためになるとは思えないもの。

新井　〝尋ね人の時間〟も男女の話ではあるんだけど、環境問題、人口問題としてアプローチする時、ああいう風にしかできないんですよ。だからどれだけ美人女子大生にいどまれても、できないわけですよ。その時に、じゃっやりましょうか(笑)となり、あげくに子供でもできてしまったりすると、昔流の私小説の世界になってしまいますよ。昔は良かったという気持ちもあるんですが。

――でも若い人なんか、最近カップルで初詣なんかも行きますね。ホテルに寄ってから帰るらしい!(笑)。親がすぐデートを許してくれますからね。

田辺　「初詣」と言えばねぇ。

新井　着付はどうするの。

田辺　このごろホテルでは、おばさんやとっているんですよ、着付の(笑)。

新井　不能の話、子供を作らない話、生れたら困る話、非常に新年号にふさわしい話題だ(笑)。

田辺　いろいろ話がでて、とてもおもしろかったわ。

――では、今年もお二人の御活躍を楽しみにしております。今日はどうもありがとうございました。

田辺邸にて――(文責／河野文雄)

●新春さわやか対談

21世紀への予感 ときめいて兵庫

ひょうごは愉快な夢らんど

貝原俊民〈兵庫県知事〉 VS 高橋孟〈漫画家〉

★イベントを通じての地域おこし・人づくり

高橋　わたしは月刊「神戸っ子」の〝兵庫ウォーク〟というコーナーで兵庫県のことを紹介してきました。もう五年くらいになりますか。取材で各地をまわりましたが、ほんとうに広いですね、兵庫県は。五つの地域の個性がそれぞれ独自の文化を生み出して、とても多様性に富んだ若い県だという印象があります。

知事　その広い兵庫を結ぶ交通アクセスがよくなり、県民の皆さんが県内を自由に行き来できるようになりました。「兵庫県にはこんなに素晴らしい所があったのか」と、びっくりしていただく機会が増えて喜んでいます。

高橋　そうですね。時間的に短縮されてたいへん身近になりましたね。

知事　神戸・阪神間は国際的な大都市。伝統ある播磨には国宝がたくさんあります。丹波は森の国。但馬は日本海に面してスキー、温泉、カニ、但馬牛等が有名だし、くにうみ伝説の淡路島は、リゾート構想で脚光を浴びています。

高橋　ほんとうに多彩ですね。全体をひっくるめてとても楽しい県というわけですね（笑）。ところで去年はイベントがたくさん開催されましたが、その成果はいかがでしたか。

知事　皆さんにたくさんお越しいただいた「北摂・丹波の祭典」は、二〇四日間（4／16～11／6）にわたって開催されました。北摂・丹波地域は、神戸・阪神等から三〇分ないし一時間で行けるようになり、新しい時代を迎えつつあります。もともと自然の豊かな地域ですが、大都市に直結する時代を迎えて、これからどういう地域づくりを進めていくかが、大きな課題です。そういったことをイベントを通して考えてみようと、この祭典を開催したわけです。〝祭り〟というのは〝政りごと〟とも言われるように、ある意味では政治なんですね。

高橋　お祭りを支えているのは住民の方々ですからね。皆さんの力が集まると、新しい何かが生まれるような気がします。

知事　この祭典は、北摂・丹波の人達の手づくりの祭典にしようということで企画され、入場人員の予測では一七〇万人だったのが、二五〇万人に

も達しました。専門家によれば、経済的波及効果も大きかったということです。しかし、何よりも、丹波の人達が自分達の将来の地域づくりについて一つのコンセンサスをつくり、自信を持って取り組もうという気運が盛り上ってきたことが最大の成果であったと思います。

高橋　孟氏

貝原　俊民氏

高橋　丹波地域には〝丹波の森〟構想がありますね。

知事　丹波の人々が力を合わせて美しい自然を守り、森を生かして快適な生活環境と新しい文化を創造し、未来へ引継いでいこうという構想です。それに、北摂・北神地域では、二十一世紀の理想都市をテーマに〝神戸三田〟国際公園都市としての整備が進められています。

高橋　他にも「国民文化祭」とか「高校総体」とか「全国健康福祉祭」とか、全国的な催しがいろいろありましたね。

知事　国際化・高齢化を迎えて、人間の生き方について皆さんとともに考えてみようということで開いたわけです。イベントに参加する中で、高齢化社会を迎えてほんとうに人間らしい生き方、文化的な生き方とはどうなのか、国際化社会の中では自分はどういった努力をしなくてはいけないのかということをともに考え、将来の行動について決意したり、宣言をしていただく。そんな効果があったのではないでしょうか。でも、そう固いことばかりではなく、楽しいイベントだったということだけでいいと思いますよ（笑）。

高橋　そうですよね（笑）。みんなが集まってお互いに気がつくこと

りは実に生き生きとしていらっしゃいましたからね。

知事　兵庫県でも、それぞれの地域ごとの大会を行い、次には全県単位でというようにいろいろなイベントを実施してはと考えています。そうすると、ほんとうの意味の長寿社会にふさわしいゆとりある生活を送っていただけるようになるのではないでしょうか。

★大阪湾ベイエリアは夢のリゾート・ゾーン

高橋　皆さん生活にゆとりが出てきましたからね。こうなると、生活を楽しめるような施設が必要となりますね。若い人もお年寄りも、ゆったりとくつろげるような…。

知事　その意味から、神戸・阪神間・播磨・淡路にかけての地域は、国際的にもこれからもっともっと脚光を浴びるようになりますね。関西国際空港や明石海峡大橋の建設をはじめ、神戸レジャーワールドや神戸沖空港、西宮・芦屋のマリーナ、それに淡路島リゾート構想、西播磨テクノポリスの8GeV・SRなど、二十一世紀にかけて夢のあるプロジェクトがめじろおしです。

高橋　リゾート構想によって淡路島はさらに魅力ある島になりますね。明石海峡大橋もできますし。

知事　淡路島には一八〇キロもの自然豊かな海岸線があるんです。大都会の近くに白砂青松の瀬戸内の自然が残っているのは、もうそれだけでも貴重な財産だし、そこに、この景観を生かした淡路島リゾート構想とか日仏シンボル構想が進められていくわけです。

高橋　あの〝自由の女神〟のことですね。

知事　フランス革命二〇〇年を記念して、「コミがあればそれもよし、若い人とお年寄りとの交流も生まれたんじゃないですか。

知事　こういったイベントは来年以降もぜひ開催したいと考えています。一つは県民総合文化祭。幸い神戸の経済界でも文化に力を入れようとされていますから、国際芸術祭も実現できないか相談したいと思っています。また、健康なお年寄りが生きがいを持って楽しい生活を送っていただくには皆さんが気軽に参加できるイベントがあった方がいいのではないでしょうか。そうすれば、これを目標にして日頃から活動していただけますからね。

高橋　そのとおりです。全国健康福祉祭のお年寄

ュニケーション」のシンボルをフランス国民からプレゼントしたいと申し出がありました。ちょうど明石海峡大橋ができる頃に完成します。

高橋　それは夢のある楽しい計画ですね。

知事　かつて、フランス国民は二十世紀のテーマが「自由」だと考え、建国一〇〇年を迎えたアメリカに〝自由の女神〟を贈りました。そして今、彼らは、二十一世紀の人類の課題が「コミュニケーション」だと考えたんですね。高齢化社会を迎えて、お年寄りと若い人とのコミュニケーション。国際社会ということで東洋人と西洋人、あるいは発展途上国と先進国など、言葉や立場の違う人間同士がお互いにいかに相手を理解しうるか。相手の立場に立って物ごとを考えたり行動できるかという、人間本来のコミュニケーションを大切にしていかなければならない。したがって、二十一世紀の人類のテーマはコミュニケーションだと、こういう発想なわけです。

高橋　ところでシンボルの位置とか大きさはもう決まっているのですか。

知事　明石海峡を望み、大阪湾を一望できる県立淡路島公園に建設される予定です。デザインはこれから決定されますが、相当大がかりなものになるでしょう。関西国際空港に離発着する飛行機からもよく見えるし、もちろん神戸港に入港する船からも見えます。パリ万博が開催された時のモニュメントがエッフェル塔でしたから、明石海峡大橋の完成を記念して開かれる予定の世界的な博覧会のモニュメントは、二十一世紀を代表する明石海峡大橋と日仏シンボルです。完成すれば、世界中の人たちが一度は見てみたいという国際的な観光地として脚光を浴びることになるでしょうね。

兵庫県庁第一応接室にて

★これからは近畿圏でパワー結集

高橋　兵庫県には五つの地域の特色がありますから〝コミュニケーション〟というテーマはふさわしいんじゃないですか。

知事　そうなんですよ（笑）。それに西宮から芦屋にかけて埋め立てが進んでまして、マリーナを中心としてハイセンスな街がつくられます。それが六甲アイランド・ポートアイランドから明石海峡を経て淡路島につながるわけで、ここには、地中海のコートダジュールに匹敵するような、文化の香り高い洒落たリゾートができるんじゃないかと期待しています。

高橋　アジアのコートダジュールですか。これは素晴らしい。神戸・阪神と淡路、播磨で競争するような形になればいいと思いますね。

知事　リゾートといえば但馬地域にも神鍋・鉢伏など関西屈指のスキー場がありますし、城崎・湯村などの温泉も有名です。これらの恵まれた条件を生かして、北但馬はスキー・マリンスポーツを中心とした滞在型のリゾートをめざし、南但馬は伝統文化や多様な人文資源を活用して子供達の学習ゾ

ーンとして整備を進めて行きます。ここに但馬空港が完成すると、新しい日本海時代が開けることでしょう。

高橋　さきほどのお話では、播磨は文化遺産の宝庫だとのことでしたが、ここにはいよいよ世界的規模の大型放射光（8GeV・SR）という研究施設が誘致されるそうですね。

知事　ええ、現在整備を進めている〝播磨〟科学公園都市に建設される予定です。これは夢の超LSIの開発や最先端の医学研究を進めるのに不可欠な大型の研究施設で、世界で最高レベルのものです。ですから、海外からも研究者がたくさん集まってくるでしょうし、世界と日本、古いものと新しいものとのコミュニケーションが課題になってくるでしょうね。

高橋　いろんな意味で、知事さんにうまくコーディネートしていただいたら随分と素敵な文化が生まれるでしょうね。

知事　兵庫県に限らず、京都・奈良・大阪といった地域全体が、近畿圏として大きな魅力を生み出して行けたら素晴らしいですね。みんな一緒になると東京にまけないスケールがありますからね。京都や奈良みたいな古都もあれば、神戸みたいな洒落た所もある。大阪へ行けばおいしいものが安く食べられる所もある。しかも互いに簡単に行き来できて、土地の値段もそんなに高くない。サラリーマンでも一戸建てが通勤圏内に買える。やはり関東よりも近畿の方がよくなってきていると思います。十年位前は、ここに住んでいた外国人が東京に転勤して行ったんですが、今は帰って来ています。グローバルに見て、関西、なかでも神戸・阪神・淡路というのは脚光を浴びてきているんじゃないかという気がします。

★国際化も普段着で

高橋　ところでこれからの国際的な交流活動のご予定は。

知事　兵庫県が姉妹提携しているアメリカ・ワシントン州が建州一〇〇年にあたります。それで八月第一週を中心に〝兵庫ウィーク〟を設定してシンポジウムや文化展を開いたりするということで、ぜひ来てほしいと言われています。建州一〇〇年のお祝いなら国際理解を進めていくうえでいい機会だから、何らかの形でぜひ参加したいと思っています。ただ、こういう国際交流というのは普段着の交流をするべきだと思うんですね。文化使節を派遣するにしても、もっと市民が積極的に参加する形で、文化を育て、国際交流を支援して行こうという一種のボランティア活動のような気持ちこそ大切だと思います。だからこれを機会に、文化交流・国際交流について普段着の付き合い方を身に付けるきっかけにできたらと期待しているんですが、皆さんのご協力をぜひお願いしたいですね…（笑）。

高橋　漫画集団も行かないといけませんね（笑）。

知事　それから、いよいよ洋上大学が実現できそうです。県下に四年制大学が二十八校あるんですが、そのうち二十五校が参加されることになりました。これは、洋上で勉強しながら世界各国を訪問して正式な単位を取得できる、大学教育としての大学で、世界でも珍しいものなんですよ。

高橋　いろいろ楽しいことがありそうですね。今年も「兵庫ウォーク」が楽しみです。

〈文責・編集部松井　恵〉

経済ポケット ジャーナル

★情報化時代のビジネス空間、神戸商工会議所会館

21世紀へ飛躍する神戸経済の殿堂として、ポートアイランドに建設中であった神戸商工会議所新会館が、昨年12月21日に竣工した。

新会館は九階建ての事務所棟と一六階建てのホテル棟のツインビルとなっており、神戸の情報化、ファッション都市化、コンベンション都市化の中枢機能を果たすため、会議施設や展示場、経済情報センターなどを設置している。同会館に寄せる期待は大きい。

神戸商工会議所新会館

★神戸ファッションマート着工

ジャパンマーケットセンター（住友信託銀行・トラメル・クロウ・インターナショナルの合弁会社）は六甲アイランドに計画している「神戸ファッションマート」の建設に12月9日着工した。完成は66年3月の予定。

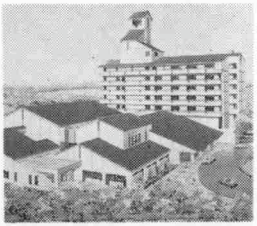
起工式の様子

同マートは国内外のアパレルメーカーやホールセラー・テナントなど約五百社が入居、世界的ファッションビジネスの拠点を目指す。

当日は、T・C・I社長トラメル・S・クロウ氏、宮崎辰雄神戸市長など、関係者約50名が出席した。

★〝しあわせの村〟春にオープン！

この春に市制100周年を記念してオープンする総合福祉ゾーン「しあわせの村」（北区山田町）が、誰にでも利用できる宿泊施設の建設をすすめている。すでに予約受付を開始。（利用日の6か月前の属する月の1日から予約可。）



しあわせの村の中核施設

●予約受付時間　平日／9時～17時　土曜／9時～12時　●予約専用電話番号　☎（078）743－8000（運営本部事業課）

★NEC神戸サントピア デザイン画大募集！

〝あなたの神戸のイメージは？〟――NEC神戸支社では神戸の街を自由に表現したデザイン画を募集、優秀作品をもとにカッティングシートを用いてサントピアショールームのウインドウガラス面にデザインする。

〝あなたの神戸のイメージは？〟

・応募期間12月1日～1月31日まで
・応募方法A4サイズの用紙（横に使用）に描かれたデザイン画と住所・氏名・年齢・職業・電話番号・作品・作品タイトルを別紙に記入のうえ、〒650 中央区東町126 日本電気株式会社神戸支社　デザイン画募集係まで　☎078－332－3311

★KOBEオフィスレディ★　楠田　純子さん（23）〈㈱朝日住建　宣伝企画課勤務〉

3分に1回は爆笑をとる。と豪語する彼女は宣伝企画課の中でも明るすぎるムードメーカー。広告の宣伝効果を分析するのが彼女の仕事。一年生社員としてやっと慣れ、意欲も出てきた。その貫録はもはや立派な10年選手？　最近の休日は友人を集めてのホームパーティーが多いという。手作りの料理を持ち寄ったり、即興ミュージカルや漫才、時には歌も飛び出しての宴で旧交をあたためている。

神戸市在住　みずがめ座のO型

□エッセイ・7

年賀状

田中　千佳〈作家〉
カット／西村　功

元日の朝、郵便受けが年賀状で一杯になっているのは嬉しいものだ。毎年のことながら胸がわくわくしてしまう。

我が家は夫が社交的、平たく言えば世話好きなので、友達が多く五百枚位用意しなくてはならない。その上、奥さん即ち私が律気で礼儀正しいので、私の分だけで二百枚弱は必要となり、十二月の後半は宛名書きに追われてしまう。

私が全部書いていたから、夫が停年で前の会社を辞めた時、これで年賀状が減ると思うと嬉しかった。ところが全然減らず、新しい会社の分が増えてしまったのだ。

夫は「俺は人気があるから」と得意そうだった。書き手の苦労など判らないらしかった。

これ以上増えたのでは、とても溜らない。私は〝自分のことは自分でする運動〟を提唱し、彼の老化防止の為に、彼の分の宛名書きを辞退すると宣言した。

二年前から、彼はフーフー言いながら宛名を書いている。苦労してこそ、頂く年賀状の有難さが増すのだからと、私は横で涼しい顔をすることにした。

思えば三十年程、我が家は年賀状に凝っている。家族それぞれの近況を説明し、写真も添える。

十一月に入ると、皆の写真を撮り、どれを載せるか家族会議を開いた。子供達も小さい内は、よく言うことを聞いてくれたが、だんだん嫌がってくる。

「恥かしい」とか「面倒くさい」とか言って協力してくれない。それを根気よく説得して何とか毎年続けてきた。

ある年、少しマンネリ化していたので、ガラリと変えることにした。クイズ式年賀状にしたのだ。

あけましておめでとうございます。今年は皆様の我が家一同に対する理解度のテストをさせて頂きます。

問題　（　）内に適当な言葉を入れよ。（回答をお寄せ下さい。粗品が当ります）

夫　東京単身赴任二回目の正月です。昨年のゴルフのベストスコア（　）

答　イ、130　ロ、72　ハ、108　ニ、98

妻　「亭主は達者で留守がいい」と言いますが、全くその通りだそうです。本人は益々（　）と申しております。

答　イ、美しい　ロ、かわいい　ハ、やかましい　ニ、恥かしい

娘　親が申すのも何ですが、大変美しいレディになりました。出来ます料理は（　）

答　イ、カップヌードル　ロ、カレーライス　ハ、フォアグラ　ニ、グラタン

息子　今年は剣道二段が目標です。ガールフレンドは（　）

答　イ、一人いる　ロ、沢山いる　ハ、全然なし　ニ、見込なし

少し省略したが、大体こんなところ、とても評判がよかった。

洒落のつもりだったのに、本当にクイズに応募してきた人が、十五、六人もあって、これには驚いた。

「粗品は何ですか」と電話の問い合せがあったりして、少し慌てた。冗談のつもりが本当になってしまって、デパートに走り、解答者全員に粗品を送った。

解答は実に様々だった。特に妻である私への答は、死んでもイとか口は書きたくないという意志がみなぎっていて、大抵、ハだった。中に、ニという人がいて、私は大変感情を害した。失礼と思わないのかしら。

又、息子への答も、ニというのがあって、「こんな奴に粗品を送るな」と息子が憤慨した。全く世間とは冷たく厳しいものである。

まあ、いろいろあったが、子供達がいる間は、毎年楽しんで年賀状を出すことが出来た。

しかし、二人共結婚して独立してしまって、夫婦二人となり気落ちして、年賀状への熱意が失せた時期があった。ところが、「毎年、楽しみに待っているのだから、頑張ってほしい」と言われ、又、しこしこ努力している。

我が家には猫が二匹いるのだが、彼女達のファンもいて、猫が写っていないと、「来年は必らず猫を入れて下さい」と催促されたりする。

猫の名前を家族の所に一緒に並べて、「二女多美、三女悠紀」と書いた時は、「奥さんはあの年で女の子の双子を生んだのか」とカン違いなさった方がいて、これは大爆笑だった。

今年の年賀状も、昨年の出来事を並べ、夫の還暦を祝って、二人で乾杯している写真を貼った。

暮れに宛名書きで苦労しているので、お正月は多数の年賀状を前にして、夫は嬉しそうだった。これからも、夫婦で愉快で斬新な年賀状を出し続けて行きたいと思っている。

〈筆者紹介〉本名林陽子。朝鮮京城生まれ。戦後引き揚げて京都に住む。旧制同志社女専英文科卒。アメリカ系商社に就職。結婚、その後出産のため退社、以来専業主婦。「マイ・ブルー・ヘブン」で昭和六十年度中央公論女流文学新人賞を受賞。現在、東灘区在住。